

昭和52年10月24日(月曜日)

徳田 教之著  
毛沢東主義の政治力学

中国は鄧小平が再復活し、軍の羅瑞卿や文芸界の周揚など錚々たる旧実権派のリーダーたちが復権し、華國鋒主席は過渡期の中国共産党の中国共産党の終焉を宣言した。文化大革命をもたらした毛沢東政治とはなんであったかが、同時代史における私たちが自身の思想のありようをめぐっても問われなければならないとき、本書は著書な成果を積み重ねつつある中国研究者の力作としてあらわれた。

党内の路線闘争をめぐる権力的実態のなかで浮き彫りすることに成功している。著者の力点は、中国共産党の組織とイデオロギ―にたいする毛沢東の「凝集力」の実態を毛沢東のリーダーシッ

いる点であろう。そこでは、毛沢東の力スミ化への道が開けたのは、各機種の圧力であるとともに、毛沢東自身の意志の産物でもあったことが語られ、延安の整風運動は、中国共産党の毛沢東化へ向う毛沢東自身による慎重に計画された「大突進」であった(九五ページ)ことが解明されている。このような毛沢東主義の生成と展開を著者はまさに「政治力学」としてとらえようとしたのが本書だといえよう。

林 徳太郎著  
プロイセン・ドイツ史研究

本書は、東京大学教授でついでこの三月まで同大学総長であった林健太郎氏の研究論文集である。氏は昨年一月にも「ドイツ史論集」(中央公論社)という論文集を出しており、そこには

氏が戦前から最近まで書いた一九世紀ドイツの政治と社会に關する主要論文が収録されている。本年再び出た本論文集は、

ユニークな研究成果  
毛沢東主義の生成と展開を政治的・組織的ダイナミックスとして把える

本書は三部十五章から成っており、著者のモチーフは、「毛沢東の役割と中国現代史とがいかに関わり、また現代中国の政治動態と毛沢東の主導性とは、どんな緊張関係を秘めているか(まげがきを追究する)」ころにあったという。第一部毛沢東主義の形成(九三―一九四五年)は著者がすでに大学教材用の小著として同じ出版社から公刊している長編論文であり、本書の中心部分を構成している。第二部社会主義の転換と毛沢東主義(一九五一年―一九五六年)は高崗・饒漱石事件に關する論文と毛沢東の社会主義社会建設の戦略に關する論文から成っており、さらに第三部現代中国の政治展開を求めては、著書が折に折に発表された評論の集成である。

プの進化の過程に照して分析しながら、七次大会(一九四五年)において完成した毛沢東の党にたいする支配の原則を抉出することにである。そして、そのような権威の頂点において予見されるカリスティックの指導者の不安と弱さが「毛沢東神話」の形成をもたらしたことを描き出している。

中嶋 嶺雄

事件に關し、とくに高崗とスターリンとの關係について評者は著者と根本的に見解を異にするものであるが(拙見については、さしあたり「高崗事件と中ソ關係」、季刊「共産主義と国際政治」(八日本国際問題研究所刊)一九七六年創刊号、参照)、ともあれ、本書が慶応義塾大学石川忠雄研究室の優れた第一期生による研究成果として「師を尊び子弟を愛護する」(二四八頁)追放後の中国のスロウガタことば、まことに御同慶にたえない。(A5三七二頁・二八〇〇円・慶応通信) (なかま・みわお氏、東京外国語大学教授・現代中国専攻)

グレアム・T・アリソン著  
決定の本質  
キューバ・ミサイル危機の分析

米ソ両國を核戦争の瀬戸際に立たせたキューバ危機が去つてから早くも一五年を経ようとしている。この間、同事件に關するおびただしい数の文献が現れた。そしてここでは、あの時点において、なぜソ連がアメリカのすべ目と風の先にあるキューバに「戦略攻撃用」核ミサイルを持ち込んだのか、また、ソ連がいったん持ち込んだ核ミサイルを撤回したのはどのような理由によるのか、といったことが論議された。本書の狙いの一つもまた著者によれば、このいわゆるキューバ・ミサイル危機の中心的な謎を解明すること



谷川 晃一・画

〈学術・研究・思想〉